

葬送  
儀礼

の現状を考える ①

死生観なき終活マーケット

浄土真宗本願寺派総合研究所  
葬儀研究プロジェクト

浄土真宗本願寺派総合研究所では葬儀に関する研究を行っています。資料調査などを踏まえた葬儀に関する新たな動向や考え方について、今号より4回にわたってお届けします

■ 備えるものへ

ここ数年、葬儀が「備えるべき対象」としてアナウンスされています。

従来、葬儀関連の刊行物といえば、葬儀を出す遺族や参列する人向けのハウ・ツー本が中心で、どちらかというと地味

来るべき日に備えよう、という啓発的な内容が受け入れられていることを示している、と理解されます。

■ 葬儀から終活へ

リタイアした世代が葬儀について考えるとなると、多くの場合は「送られる当人」としてということになり、葬儀について考えることは同時に、人生の締めくくりを考えることにつながるようです。

そのような傾向を示す事例のひとつに、自らの人生の終末を考え、整理するための「エンディングノート」の増加が挙げられます。

ちなみに一般的なエンディングノートでは、(1)生年月日や趣味などの個人的な情報にはじまり、(2)財産に関すること、(3)葬儀や遺骨、墓地に関すること、(4)緊急時の医療（ホーム・ドクターや延命治療など）に関すること、(5)家族や知人へ伝えたい（遺したい）自らの思い、(6)余生をいかに生きるか、などを記すことがで

な体裁のものでした。それに対し、ここ数年の傾向として新たに刊行されたものは、地域性を考慮した各地域版の発行をはじめ、芸能人へのインタビュー掲載、洗練された装丁など、多面的に読者に訴えかけるものとなっています。

なかでも注目すべきは、そうした刊行物の内容が、遺族や参列者のためのものではなく、むしろ生前から「自分」の葬儀について考えましよう、というもので、リタイア世代を対象としている点です。

こうした傾向は、リタイア後にできた時間的余裕のある生活のなかで、自身の

きるようになっていきます。

このように、一言で「人生の終末を考える」といつても、その内容は多岐にわたっています。そして、そのそれぞれに對し、さまざまなビジネスチャンスが見いだされており、従来にはない多様な商品やサービスが開発・提供され、一大マーケットとしての活況を呈しています。

そして、こうしたさまざまな要素からなる人生の終末について取り組むことを、近年では「終活」といい、この数年、「終活ブーム」と呼ばれるほどの盛り上がりを見せています。

こうした潮流のなかで見ると、これまでひとつの儀式として語られていた葬儀は、もはや「終活」という大きなマーケットのなかに取り込まれつつあります。この点は、これからの葬儀を考える上で無視できないものではないでしょうか。

## ■終活の現状

このように、近年、葬儀から終活へと、

より大きな括りで人生の終末を考えると、この価値観が登場したわけですが、忘れてはならないことがひとつあります。それは、こうした流れが、葬儀関連業者やマスコミ側から起こったもので、そこに僧侶などの宗教者がほとんど不在であったという事実です。

そのためもあって終活の多くは、宗教的な内容よりも、相続や葬儀費用などの経済的な側面に割かれる傾向にあります。また、個人の思いを家族や知人に伝えたい（遺したい）という、ヒューマニズム的要素についても、それなりの充実は見られます。

もちろん宗教的な要素もない訳ではありませんが、どちらかというと、焼香などの儀礼作法や、各宗派の紹介（本山や本尊について）など、ほとんど従来の葬儀関連書籍（ハウ・ツー本）の域を出ていないのが現状で、人が避けることのできない「死」という問題について、宗教がどのように応えるのか、という点については、十分に語られていないのが現状

です。

## ■僧侶の役割

従来、僧侶は葬儀の現場において、ひとつに儀礼執行者としての役割を担ってきました。その意味で、僧侶が滞りなく儀礼を行うことは、重要であるといえます。本願寺出版社から葬儀の規範やその解説書が刊行されているのも、そのためです。実際、僧侶の声が素晴らしい、作法やお荘厳が美しい、といったことが契機となつて、本願寺派のお寺に葬儀を依頼されることもあるようです。

しかしそのような法式にのみ、葬儀における僧侶の役割を矮小化して考えるべきではないでしょう。法式は、浄土真宗のみ教えを伝えるために必要な一要素ではあります。僧侶に求められているのは、その部分だけではないはず。極端な言い方をしますと、衣体を着けて儀礼を行えば、儀式としての葬儀は成り立ちます。しかし普段から門信徒の

方々とおつきあいをされる方であれば、葬儀という儀礼を執行するだけではなく、親族の死を目の当たりにした遺族の方々といろいろお話をされることもあるでしょう。なかには、「死ぬということ」についてお話をされた経験がある方もおられることと思います。

もちろん話の内容については、濃淡あるかもしれませんが、そこには必ず「リアルな死」について一緒に考える、という時間があるはずです。

## ■現代社会と「死生観」

今日の日本では、「死が隠される」傾向にあり、また恒常的に死と隣り合わせ、という状態にもありません。

しかし、そうした状態であるがゆえに、多くの人々が、死に対する耐性がないまま「いずれ訪れる死」に晒さらされている状況にあるのではないのでしょうか。

また私たち浄土真宗の門信徒にとって、死とは、往生浄土の素懐そかいをとげると

いう人生の大きな区切りです。浄土真宗の門信徒でなくとも、自らの死や大切な人の死は、大きな出来事であるはずで、であれば、自らの、あるいは大切な人の葬儀についても、その何たるかについて考えるものではないでしょうか。

直葬や僧侶不在の葬儀が受け入れられるという現状は、「リアルな死」について充分に考える機会がないまま、あるいは考えることを拒絶したまま、いずれ死に直面せざるを得ない死に向き合っているだけの「死生観」を持ち合わせていないことを示しているのかもしれませんが。

\* \* \*

「住職、私のお葬式頼みますよ」――

このように言われたことのある僧侶は、決して少なくはないはずです。その言葉は、必ずしも深刻に発せられたものではなく、むしろその響きは、挨拶程度あいさつの軽いものであることが多いかもしれません。しかし、言われた僧侶にしてみれば、信頼関係を表す最高の言葉の一つではな

いでしょうか。しかもそれは、お葬式の経費や、葬儀の進行などの細かなことについてのものではなく、自らの死を任せるといって、宗教的存在たる僧侶に対しての発言なのです。

葬儀形態の変化をはじめ、葬儀を取り巻く問題は多岐にわたっています。そうした個々の課題を乗り越えることも大切ではありますが、宗教者として葬儀に携たずわるのであれば、やはり今日の終活ブームや葬儀マーケットにおいて欠落傾向にある宗教的課題Ⅱ死生観の欠如に向き合わせねば、抜本的なアプローチにはならないでしょう。

それは単に教団としての全体的な取り組み（マニュアル類の作成や講習会の開催など）だけで可能となるものではありません。僧侶一人ひとりが死生観についての学びを深め、門信徒の方々とお話するなかで、日頃から死生観に携たずわる者としての信頼関係を構築する、いわば伝道のあり方そのものにこそ、期待されるものではないでしょうか。（福本康之）